

VIII

水と緑の都市デザイン 平成23年6月22日



講師
宮澤好

鈴木: きょうは「水と緑のまちづくり」をテーマに、当時、都市デザイン室で一連のプロジェクトを担当された宮澤好さんをゲストとしてお招きして、特に川を中心にお話を伺いたいと思います。前回の「市民参加と都市デザイン」に若干関わる部分もあるかもしれませんが、そういった前回のことも背景として頭に置いていただけると、より深い理解が得られるのではないかと、思います。

宮澤: どうも、初めまして。今回、鈴木先生の方から「水と緑のまちづくり」について話してほしい、と言われまして、もう20年から30年前にやったことですが、前々から自分の関わった仕事が今、どうなってるのか気になっておりましたので、今回、良い機会なので、何力所か、歩いてみました。

私は昭和45年(1970)に横浜市役所に入りました。当時、横浜の人口は年間10万人増える、という時で、学校が年間で約二十数校、新設する必要がありました。児童・生徒の急増に間に合わないので、グラウンドにプレハブの校舎が溢れているという時に、建築局に入り、学校建設に携わり、ともかく造れ、造れ、ということで数年過ごしてまいりました。

昭和45年(1970)はちょうど都市デザイン室の前身、アーバンデザイン担当ができた年です。そうこうするうちに1970年代の後半、急場しのぎで建てた学

校ではなく、きちんと地域の中に存在する学校にしよう、と当時のアーバンデザイン担当が「都市における学校」というテーマで学校施設検討委員会というのを作った。それが私と都市デザイン室の関わりの発端です。

そうこうするうちに、横浜六大事業の姿がだんだん現実に立ち上がってきた。港北ニュータウンや金沢地先の埋立等もだんだん基盤整備ができて、いよいよ人が張り付いてくる、という時期に、私は、学校を地域の一つの核にしてまちをつくらせたい、という希望で港北ニュータウンに移りました。それで小中学校の計画、集合住宅の計画調整等を仕事にまいりました。

都市デザイン室で都心周辺と郊外を

その中で、日常的に都市デザイン室と連携してやる仕事が出てきて、国吉さんに「都市デザイン室と一緒にやらんか」というお話を頂きまして、昭和57年(1982)、デザイン室に参りました。それから約10年、私は「水と緑のまちづくり」と「区の魅力づくり」の両方をやっておりましたが、私は、まち中の方は既に国吉さんがしっかりやってらっしゃるので、都心周辺と郊外を中心にやろうかな、とと思っていました。国吉さんはあせいこうせい言わなくて、都市デザイン

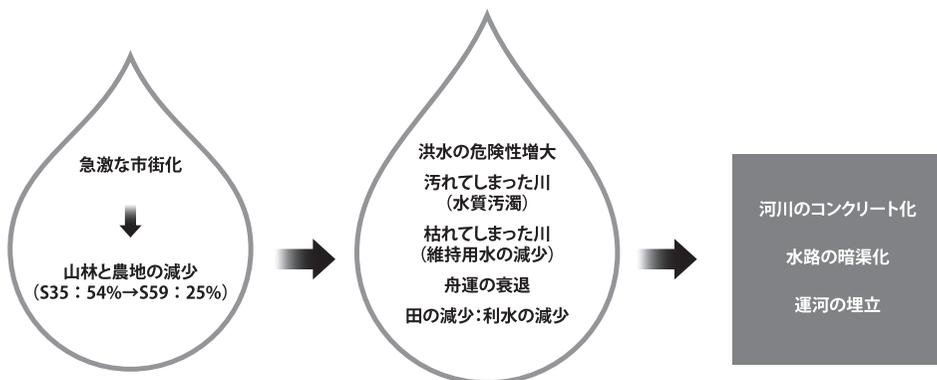


図1

室は「宮澤流で何をやってもいいよ」という雰囲気がありましたので、伸び伸びと自分のテーマをやらしていただいた、という経過がございます。

約10年、おりましたけれども、上大岡の副都心の再開発がいよいよ動いてくる、ということになり、そちらに行きました。こちらは大岡川がまさにまちの軸としてあるものですから、再開発をやりながら、道楽で川の環境整備をフォローしていました。その後に新横浜総合運動公園になっているところの、ワールドカップの決勝戦会場（横浜国際総合競技場）の建設に4年間、関わりました。その傍ら、ここを含めた多目的遊水地の計画調整も一方でやっていました。その後、港北ニュータウンにまた戻ったりしております。きょうは、都市デザイン室にいた時からそれ以降、5年ぐらい、1980年代から90年代の最初の頃の話を中心にさせていただきます。

都市の膨張で川離れが進む

ご承知のように、かつて、ものすごい都市の膨張があり、緑の対象になる山林や農地が、昭和35年（1960）の54%から、昭和59年（1984）になるとその半分以下と、急激に緑地がなくなっていく中で、保水機能がなくなっていました。降った雨がすぐ流れてしまい、洪水の危険性が大きくなってきました。それ

から、人口が増えれば、当然、水質も汚れる。小さなお風呂にいっぱい人が入れば、いくら体をきれいにしてお風呂に入っても、やはりお風呂は汚れてしまう、というわけですね。そういう圧倒的な人口集中やもろもろの産業活動により、川の水質汚濁がものすごい勢いで進行していました【図1】。

一方、水そのものも減ってきました。水源林が減って、水のない水路が出てきました、河口部ではコンテナ化が進んで、はしけがなくなり、運河の機能がなくなっていく。それから減反政策で、田んぼがどんどん畑に変わる。そうすると、水をまく時に、田んぼならば自然の水を使うのですけれど、畑だと、井戸を掘って、その水でかんがいするので、川の利水そのものが期待されなくなってくる。こういう中で治水に偏り、河川のコンクリート化、水路はどんどん埋め立てで暗渠になる、運河の埋め立てが進む、ということで、市民の川離れが進みます。

雨水を流すために、道路の下はガス、水道、雨水以外を流す下水の管で満杯で、川の下なら、雨水を流す本管を通すのにいい、ということで、排水路を通して川を埋め、その上をプロムナードなどにする事例はありましたけれども、市民の川離れもありました。少し前のデータですけれども、大体、横浜市内に降る雨水のうち、3分の1は蒸発と、葉や木により蒸散される。それが年間約5億tだそうです。残りの3分の2は流れ

市民の川離れ



市内の雨水流出量 = 市外からの水道給水量 = 年 5 億 t

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

VIII

都市デザインと市民参加

水と緑の構造

図2

● 3大港湾

横浜港、根岸湾、金沢湾

● 7大河川軸

鶴見川(市内唯一の1級河川)

入江川、帷子川、大岡川

宮川・侍従川、

境川、柏尾川

● 3大環状の緑

外環状(7大拠点：保全活用)

中環状(既成市街地：回復再生)

内環状(臨海部：創造)

● まとまった農地(市街化調整区域)

鶴見川流域(都筑区、谷本川、恩田川)、

境川流域

都市デザインのお組

・水辺空間の保全活用をUD基本的目標に位置づける(1970年)

・大通り公園水の広場(1977年)

区の魅力づくり基本調査(1980～83年)

・大岡川プロムナード・南区(1980～83年)

・柏尾川プロムナード・戸塚区(1982～87年)

・磯子海釣り場(1982年)

水と緑と歴史のプロムナード事業(1984年～)

・三ツ沢せせらぎ緑道(1984～87年)

・磯子アベニュー(1984～88年)

・石崎川プロムナード(1987～90年)

・瀬上沢小川アメニティー(1985～87年)

・ほか9ヶ所、小川アメニティー

河川をめぐる動向等

・鶴見川が総合治水対策特定河川指定に(1979年)

河道改修だけの治水対策の限界

流域で保水、遊水機能を確保

・河川審議会答申(1981年)

治水・利水の管理と並んで、河川環境(親水)

管理の必要性を提言

・よこはま川を考える会発足(1982年～)

第1回横浜縦断カヌーフェスティバル

上大岡地区川そうじ

・鶴見川多目的遊水地事業着手(1985年)

図3

てしまう。一方、水道の給水量のうち、工業用水を含めて、同じく年間5億tは市外から持ってきています。まさに自分のところに降った雨は使わないで流してしまい、よそから水を持ってきている。そういう都市としてはアンバランスな構造があるのが横浜だと思います。

七つの河川軸へのアプローチ

横浜の水と緑の構造は、まず三つの湾、横浜港と根岸湾と金沢湾があり、河川の軸は七つあります。まず鶴見川。これは1級河川で、河口から途中までは国の管理、その先は県の管理で、支流の細かいところが市の管理です。典型的な1級河川ですので、国が河口のところを管理しています。大岡川は分水路のところまで全て県の管理です。帷子川も分水路のところまで県の管理、柏尾川も県の管理、境川も途中までは県の管理です。さらに宮川、侍従川、入江川もありますが、基本的には管理権限が市にない。まちづくりの中で、主要な要素であるのに、我々が管理できない。どうアプローチしたらいいのか、というのが私の問題関心としてありました。

緑の方は「緑の7大拠点」と当時から言われておりましたが、いわゆる多摩丘陵が外環状、中環状と見立てられる下末吉台地、それから海沿いの臨海部の緑が内環状という「3大環状」があるのではないかと、思います。まとまった農地という意味で見ると、境川水系と、多摩丘陵から東京湾に流れる鶴見川流域に当時、ありました。それから港北ニュータウンの周りの恩田川とか谷本川流域にもまとまった農地がありました。【図2】

大体、そんなような構造の中で、何とか川の軸を意識したまちづくりが展開できないか、というのが問題関心としてありました。一方、1970年以降、水辺の再生はどんなふうに取り組まれていたかと言うと、まず、都市デザインの取り組みとしては昭和45年(1970)、アーバンデザイン担当ができて、アーバンデザインの基本的な目標の一つに「水辺の空間の保全と活用」を明解に目標に設定していました。それに基づいて1970年代は大通り公園などを手掛けます。次に

南区の大岡川プロムナード、それから磯子区の区役所前のアベニューの整備などをやりました。

1970年代の水辺の再生としてもう一つ、代表的なのは、山下公園前通りに接している県民ホールとその向かいの産貿センター、そこがピア広場になっていて、広場の中心に噴水が象徴的に置かれました。産貿センターの噴水は、地下の出入り口を作るために、今はなくなりました。噴水でまち中を演出した事例です。

1980年代に入ると、都心部でやってきた都市デザインの仕事を周辺部でもやろうということで、区役所周辺の歩行者空間整備を行い、その一環で大岡川プロムナードや柏尾川プロムナード、いわゆる桜の名所を気持ちよく人が歩けるようにしようよ、ということから水辺のプロムナードが始まっています【図3】。

80年代の後半は「水と緑と歴史のプロムナード」ということで、今まで各局ばらばらにやっていた事業を束ねて展開しよう、ということになる。そのために財政的裏付けをきちんとする。例えば道路局なり緑政局なり、あと下水道局に「もう少しレベルアップして、歩行者空間を造ろうよ」と言った時に、財政的な裏付けがないと、「やはり都市デザインは格好いいことだけ言っていて…バックアップをちゃんとしてよ」と言われる。当時の財政局の人と相談する中で、水と緑と歴史のプロムナード事業として自治省の起債を導入してやっていました。これが昭和60年(1985)以降の仕事としてあります。

その中で、先程言った排水路が埋め立てられて、その跡をプロムナード化する仕事の中に、近くに水源のある場合には、その水源を生かして、そのプロムナードの中に水を流そう、ということで、局際的な事業でやったのが「三ツ沢せせらぎ緑道」です。これは地下鉄の三ツ沢上町の駅近くにあるのですが、その地下鉄の駅に相当いい水がこんこん湧いている、というので、その水をすぐ脇の反町川に流す、という試みをやっています。

それから磯子区役所も、山の方から地下水がしみ出てきて、地下室に相当いい水が出ており、それを使って、プロムナードのところにせせらぎをつくる試みをしております。

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

細河功
賀谷まゆみ

宮澤好

河道改修中心から総合治水へ

河川を巡る状況について。河川担当部局は治水が非常に大事だ、と考えます。当然ですよ。鶴見川などは大きな災害を随分起こしてきました。昭和57年(1982)以降はそんなに大きい水害はないのですが、それまでは大きな台風が来るたびに膨大な被害を出していた中で、河川改修をメインにやってきました。けれども、これだけ流域が市街化すると、もう河道の改修だけでは限界があるので、「総合治水」という言い方で「流域でも保水機能や遊水機能を確保してください」ということになる。それまでは河川担当だけで治水をやっていたのが、もう流域にやってもらわないとたない、ということが出てきたのが総合治水だ、というふうには理解しています。

河川担当部局は、膨大な許認可権を持っていて、国民の生命と財産を守る、という役割があります。「治水」と言われると、こちらは何にも言えない。という全体の状況が1970年代後半まではありました。そういう中で、鶴見川が最初の総合治水のモデル河川です。

延長が42.5kmでマラソン・コースと同じぐらいの長さで、1級河川では小さい方です。ただ、一朝ことがあると甚大な被害が出る、ということで、建設省がここをモデル河川にして、流域と一緒に川を考えたかなければいけない、ということで取り組んでいました。

そうこうしているうちに、昭和56年(1981)の河川審議会の答申の中で、治水・利水だけではなくて、河川環境、いわゆる親水機能をきちんと位置付ける必要がある、というのが出てきます。全国的に、私が一番印象に残っているのは、広島の本田川です。その河川改修は本当の素晴らしいデザインで、私も見に行きましたけれども、非常に参考になりました。そういうことが日本でも可能なのだ、ということに気付かせてくれました。

よこはま川を考える会、発足

昭和57年(1982)に「よこはま川を考える会」が発足します。これが私にとって一番勉強になった、仲間

たちとやった活動です。これは、横浜市の職員が約3分の1、それからコンサルタントの人が3分の1、それから市民の方が3分の1というような構成で、200人ぐらい会員がいました。

非常にいい加減な組織と言いますか、運動体と言いますか、まず、代表も規約もない、出入り自由。誰かが言い出しつぺになるプロジェクト方式で、「この指止まれ」方式でやっていこうという場でした。まず、当時「どぶ川」と言われていたところで遊んでみようという遊び心で、川とかかわって行くゆるやかな活動から始まっています。

今も毎月ニュースレターを出していて、確か今年の4月で350号になります。毎年秋に、大岡川の河口部でカヌー大会をやっております、これも今年で30回になります。この大会を最初にやったのも昭和57年(1982)です。

もろもろ、日本のいろんな河川を巡る動向はあったのですが、私がいろいろ相談したのが森清和さんです。森さんは昭和59年(1984)に『都市と川』というそのものずばりの本を書いています。この本は役場の中の人間だけではなくて、全国的に影響を与えました。当時の最先端を走って、水辺の再生を提案している人として、私は非常に影響を受けました。

基本構想—川を座標軸としたまちづくり

そういう背景の中で、どうやってプロムナード整備を超えた、いわゆる横浜市の下管理下でない川、これをどういうふうなまちづくりの中に取り込んでいくか、というような問題意識で昭和60年(1985)に基本的な構想「基本構想—川を座標軸としたまちづくり—」を作ります。そのために、ともかく歩きました。市の中の全部の川を歩く、ということで始めました。今、副市長の小松崎さんが担当係長で、彼と一緒に、初年度、自転車に乗って、1年間、ともかく回りました。

この基本構想を策定するに当たって、コンサルタントには一応、頼んだのですが、こちらの希望通りには進めてもらえませんでした。当時、河川とまちの関係を考える、というコンサルはどこにもいかなかった

のです。川は川屋さん、いわゆる自然保護は自然保護派、いわゆる公害反対運動から来た流れの中で、自然環境を大事にしなければいけない、という流れの人もいました。もろもろいるのですが、まちの中で川をどう生かすか、というコンサルは、残念ながらない、という状況の中で、先程申し上げました森清和さんと、川を考える会のメンバーといういろいろ議論しながらやっていったわけです。

まず、第一に考えたのは、鶴見川で、現況調査を踏まえ、やはり国を入れて考えていかないと進まない、ということで、鶴見川について流域環境総合整備計画というのを立てよう、ということになりました。学識者としては今、関東学院大学の宮村忠先生らに入ってください、国は建設省の京浜工事事務所、県は河港課、市は港湾局以外のハード部隊が全部、というような構成で、検討懇談会というテーブルをともかく作りました。

何で鶴見川を最初にやったかと言うと、建設省の京浜工事事務所の歴代の所長は、積極的な人ばかりだった、ということも一つ理由です。

そんな経緯の中、基本的なテーマとして「川を座標軸としたまちづくり」を掲げました。要は、今まで川というものが抜けていた。これを軸にしてまちづくりを考えていったらどうか、ということで、テーマとしてはまず、水辺と一体となったまちづくりをしようじゃないか。県や国の管理だった川も取り込んだ一括したまちづくりをしようじゃないか。それから、川というのは考えてみると、すごく身近なところにある自然じゃないか。ありふれているのだけれども、横浜の川ですから、たかだか100mの川幅しかないのですが、それでも貴重な自然じゃないか、という視点もありました。

それから、当然、総合治水に代表される河道改修だけでは限界がある、という中で、やはり流域の人も一緒になって水の問題を考えていこう。災害に強いまちをどうつくっていくか、と。それから、先程のお話で言うと、やはり、川を楽しむとか遊ぶということを大切に活動を展開していこう、ということも。基本計画では、それらを踏まえた物的な整備をしていったらどうか、というふうに考えました。

ここであえて言うと、河川管理者と横浜市は、率直に言って、意見が合わないこともありました。河川管理者には河川管理者としてのしっかりした考えがあります。しかし都市化が進む自治体としては河川管理者の方針に合わせにくいこともありました。双方で平行線のような状況でした。そこでどういうテーブルをつくらうか、という時に、やはり市民の活動、具体的な活動があれば、双方をつないでいくのではないか、ということで、川の会との関係を考慮に入れました。

鶴見川のアンケートできっかけづくり

最初に取り組んだのが、鶴見川の鶴見区の副都心の水辺の整備です。

そのため、最初に鶴見川のアンケートをやりました。鶴見区内に、本社機能も持った企業が結構あるのですけれど、その人たちが鶴見川に対してどういう意識を持っているか、というアンケート調査をやったのです。実はこのアンケートをやったのは、一つのきっかけづくりです。プラントや住宅関連などの大きな会社で、本社機能を持った会社があるのですが、区役所としては「敷居が高い」という感じで、アプローチしにくい状況がありました。そこでアンケートを作って、ヒヤリングに行きました。

いろいろ聞いてみると、もともと物資を鶴見川を使って運んできた、という歴史があって、今は使っていないのだけれど、やはり川に対する思いがある、というのが分かってきました。それで、実際にヒヤリングした人たちと「じゃあ、川を歩こうよ」ということで、川を歩いたり何かしていくうちに「鶴見川を楽しくする会というのをつくろう」ということになりました。当時の企業の総務部長さんたちに非常に関心を持っていただきまして、何社かの総務部長さんが主になって、若い社員を連れてきて、実際に川を歩くことから始めました。

もう一つ、鶴見川の河口部は、幅が100mぐらいあるので、そこを使って、いかだのイベントをやろうよ、というようなことになりました。区役所がイベントの可能性をいろいろ調査して、安全対策とかを全部調

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

べて、当時の横浜市制100周年記念イベントのプレイベントという位置付けで、「いかだ大会」をやりました。これが結構好評でして、本当は一年で終わるはずだったのですが、当時の区長の理解もあって継続され、以降、3年前ぐらいまで20年間やっていたと思います。

この流れの中で、鶴見川全体のネットワークの組織、鶴見川流域ネットワークが平成3年(1991)に発足しています。これらを踏まえて、検討懇談会をやったり、シンポジウムをやったり、橋の架け替えをする時に、それを契機にして、その周りの地区の拠点的な整備をやろう、ということで計画調整に入りました。

多目的遊水地の上に競技場

新横浜では昭和60年(1985)、「多目的遊水地」の事業に着手します。新横浜の近くで、鶴見川はちょうど90度に曲がります。それで、こちら辺は昔から自然の遊水地だったのです。要は田んぼで、ずぶずぶの深田だったところですよ。そこから下流はほとんど河川の勾配がないので、いくら河道改修しても限界があるのですね、浚渫はしているのですが、どうしてもここから下流が弱い、ということで、ここで水を貯めよう。昔からここが田んぼで自然の遊水地だったわけですから、それを復元しよう、というようなことで、建設省が多目的遊水地を造ろう、となったわけです。

国がやったのだけど、単に遊水地だけではもったいない、普段は水がないわけですから。それを横浜市の方で何かうまく使ってくれ、という話が国からありました。それで国と横浜市の役割分担の調整を、1980年代後半からやっています。遊水地の上を公園として利用するため、グラウンド等の整備は横浜市がおこなうことになりました。用地費は国が半分、横浜市が半分、という大まかな役割分担をしました。いわゆる池を掘り、堤防をつくる仕事は国、公園と競技場の整備は横浜市、ということで始まった事業です。

平成2年(1990)、横浜市は公園整備事業に着手します。当時、高秀さんが市長になりました。高秀さん

は、元は建設省の事務次官で、水資源公団の総裁もやっていたから、水関係は強い、ということで弾みがつきました。1999年(平成11)の神奈川国体をとにかく横浜に持ってきて、そのためのメイン会場として競技場を造ろう、ということで用地買収に入ったのです。

全部で100haぐらいあります。その100haの土地は、市街化調整区域に横浜市が指定してあったものですから、京浜工事から本当に感謝されました。「新幹線の駅から、歩いて10分という場所を、よくぞ市街化調整区域にしといてくれた」というのが、京浜工事の人のよく言っていることでした。

実際、国が買いに入ると、なかなか売ってくれない人もいました。そこへ競技場を造るために横浜市が入っていき、何とか土地を買い上げることができたのです。国の得意としていることと市の得意としていることが、うまくかみ合いました。

ワールドカップ開催の翌年から

もう一つ、ここで言っておきたいのは、自然派の市民活動団体は、やはりすごく期待していました。ここに遊水地ができるのだとしたら、ラムサール条約の対象になるぐらいの沼を復元できないか、という夢を持っている集団の方もいました。そういう自然を大事にしたい人に対して、スポーツ関係の市民グループがいます。野球場がない、サッカー場がない、というようなスポーツ需要の方が圧倒的に大きく、自然派はやはり少数派ですが、何とか全体の利用について折り合いをつける調整を行いながら作っていききました。

それで無事に、国体を平成11年(1999)に開いて、FIFAワールドカップを平成14年(2002)に開きました。これが終わった翌年に初めて、遊水地に水を入れる、ということになりました。ワールドカップが終わるまでは、周りを駐車場で使い、いろんな施設を配置するから、それまでは待つてくれ、ということです。平成15年(2003)から平成22年(2010)末までに8回、水が入ってきているそうです。ここより流末の方に、水害を

未然に防ぐ、という役割を既に果たしている状況です。

遊水地の中では、今、有志の人が田んぼをつくって、イネを栽培しています。競技場の中には、プールやスポーツ医科学センターがあつて、その天井のアートは、国吉さんにも監修してもらつてやりました。渡辺豊重さんというアーティストによる天井画です。国体の時に使った炬火台は、川上喜三郎さんという方が、コンペで選ばれて、提案したものです。

下水道局の下水処理場は周りを緑化して、その上を公園にしています。下水処理場から出てくる、処理水の水門の脇に、昔の水路だったところを埋め立てして、プロムナードをつくりました。ここは周囲に町工場が多いので、町工場で使わなくなった機械を、プロムナードのところに並べて、モニュメントのようにしています。お母さんと子どもが遊びには来てくれるようです。

遊水地から少し下流に行くと最近、芝張り護岸もできています。川べりに建つマンションの開発をした時に、川と同じレベルで土を入れて緑化してもらった事例もあります。以前に比べると、随分散歩する人とか、ジョギングする人とか、サイクリングする人が増えています。鳥たちも来てくれるようです。一番うれしかったのは、この辺りの橋の脇にスーパー銭湯ができて、そこで鶴見川のマップを売っているのですよね、感心しました。僕も休日に川べりを歩いて、その銭湯で風呂に入り、ビールを飲んで帰ってきたのですけれど、こういうのが川べりにどんどんできると楽しいな、というふうに思いました。

下流の森永橋近くの下水処理場の脇には、カヌーとかボートとかの倉庫、艇庫があつて、いつでも使えるようになっています。その対岸は階段護岸になっていて、先程のカヌー・フェスティバルなどがあると、みんなここに座って見るのです。

港北ニュータウンで水の試み

港北ニュータウンの、ちょうど真ん中に早瀬川がありまして、その水辺の整備をしました。当初、周辺の道路と同じ高さで造成して公園にしようとしたので

すけれど、水辺に下りられるような仕掛けにしよう、ということで、地元の意向も踏まえながらやってきました。今は結構、散歩には来てくれるようです。ただ残念なのは、整備しても、周辺の建物が川に向かって全然開いてない。全く窓がない、とか。本当は川に面したところにカフェなどがあると最高なのですが。できればまちのサイドでの、川と一体となった使い方が望まれます。

港北ニュータウンの一つの事例で、最初にまち開きした辺りの、集合住宅のエリアにあります。真ん中に保存緑地があつて、「この団地を開発する時に、ここを緑地としてとっておいてください」という前提で土地を売りました。その南側には昔、ため池だった公園をそのまま残して、周りの斜面緑地も残している、という典型的なパターンのところがあります。ここはデザイン室と一緒に計画調整をしています。

この辺りの上流のところは生物層保護区として、ふだん人を入れない、観察する時にだけ入れるようになっています。団地の中の保存緑地の竹の管理は、その団地の管理組合の人がやっています。管理組合でそういう活動をやっていた人たちが公園に出ていって公園愛護会を作り、さらにそれが発展して、港北ニュータウンの緑の会という、港北ニュータウン全域のネットワークができています。それが一番初めにできた団地ですから、この最初にできた団地に、自然を愛する人が来てくれて、幸せな出会いをしたと思います。

緑地をとっておくだけではなくて、水については、まず保水機能を高めています。基本的に雨水浸透するようにして、緑道に透水管を入れて、池の水の確保をしたりしています。保水機能を担保してせせらぎの水源にする。あと棟と棟の間の広場に15cmぐらい水が貯まるようにしています。棟間貯溜も初めてやった事例です。

上大岡再開発を川掃除から始める

それから上大岡です。上大岡は「横浜の副都心」と位置付けられていました。

この整備では最初に、駅前の再開発にとりくむ前

土井一成
小沢朗

今井信一
堀勇良

小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

に、みんなの気持ちをそろえるために、再開発協議会をつくるとともに、昭和58年(1983)に最初の川掃除をやりました。その川掃除を契機にして、具体的に自分たちでもできることもある、という意識が生まれました。賛成・反対の意見がいろいろ出ました。鎌倉街道が混んでいるから、川を埋めて駐車場にでもしてはどうか、という人がいた時期もありましたが、「いや、そうじゃない。やはり、身近なこういう空間が大事なんだ」ということになって行きました。

昭和58年(1983)のシンポジウムの時に、影響を与えたくれたのが長崎です。長崎の中島川、川の幅が大岡川と同じぐらいだったのです。当時、この中島川で川掃除などをやっている、ということで、そこに学び、シンポジウムをやって長崎大学から先生に講演に来てもらい、それから川掃除に入った、ということです。

第1回目には周辺のおじさん、おばさんが千人ぐらい、集まってくれました。それでゴミが30tぐらい、みんなで引き揚げて、その後、乾杯。これが目的でやっているような人も結構いましたけれども。

横浜市立大学の先生が、上大岡のまちづくりに結構入ってきまして、先生の教え子たちが、子どもの川遊びをバックアップしてくれました。大きな水車を作ったこともあります。大学の先生の役割がすごく大きかったです。

そういうもろもろの川掃除をしながら、本番の再開発が行われました。平成3年(1991)から平成8年(1996)に、まず第1回目のA地区の再開発、引き続きB地区。C地区は平成22年(2010)に終わりました。これらの出発はやはり川掃除だったな、という思いがあります。

村橋先生と「まいおか水と緑の会」

次に源流や上流域の事例をちょっとご紹介します。

舞岡川と舞岡公園の事例です。舞岡は、地下鉄の上大岡から戸塚に抜ける、市街化調整区域の一番奥にあります。地下鉄の舞岡駅からこの公園に行くまでの間を、小川の整備をしたので、駅から降りると、突然、田園風景になっています。私は上大岡に住んでいた

のですが、舞岡によく遊びに行っていました。

ここには「まいおか水と緑の会」というグループが昭和57年(1982)に発足しました。これも横浜市大の村橋先生が中心になって、まだ公園になる前、ぼうぼうのアシ原だった時に開墾に入ったのです。私も子どもを連れて開墾に行きました。

その時、公園の予定地で、まだ完全に横浜市が管理していなくて、自由に使える、勝手にやってもいい、という雰囲気があったようです。ほかの自治体では、農業公園のようなものを造っても、ほとんど失敗している。それを見て、整備を先行させるのではなくて、汗を流しながらやっていこう、という考えが一つありました。それから村橋先生を中心に戦略もしっかりしていました。それから富士フィルムの基金が利用でき、1年間、1000万円ぐらいでしたか、予算がありました。横浜市役所だけでなく、そういう基金の裏付けもあった、というのは幸せな出会いだったと思います。

今も田んぼや畑があつて、お休み所や農作業のために民家があつて、そこは活動団体が運営しています。「まいおか水と緑の会」の経験を生かして発展してきています。田んぼでは子どもたちとお母さんらが春、田植えをして、餅米を植えて、それを刈り取る秋には収穫祭をやっています。

まいおか水と緑の会が活動している時に造った井戸もあります。その時、僕もお手伝いしたのですけれど、いわゆる「かずさ掘り」、機械を使わないで人力だけで掘る方法です。今、海外に行って人力だけで井戸を掘って灌漑用水にする活動がありますけれど、その発想を持っている人々が来て、掘ってくれた井戸です。

それから舞岡小学校周辺の整備もしました。この小学校ができたのが、ちょうど私がこの川のことをやっている時でした。この学校の校長先生が学校の愛唱歌をつくり、その中に「川に入ろう」という歌詞がありました。当時は「川なんて危ないから、生徒は行っちゃいかん」という先生が大勢だったのですが、この校長先生はまず川に入ろう、と提唱してくれました。

整備に入る前の川岸には、防球ネットが張られ、水辺に触れ合うということはできませんでした。校長先生が、何とか子どもたちを川に入れたいんだ、という

ので「じゃあ、一緒に考えてやりましょう」と、子どもたちとワークショップをやりました。川のワークショップをやった最初の事例です。子どもたちと相談しながら作っていき、子どもたちが橋に「かるがも橋」という名前を付けてくれました【図4】。

いたち川で多自然型河川の実験

源流域、中流域での多自然型河川改修の展開もいくつかあります。

中流域ではいたち川の整備があります。これは柏尾川の支川ですが、最初に、横浜市役所の管理している川の環境整備に入ったところでした。昭和57年(1982)に低水路の整備をして、10年後に再び手を入れて、いわゆる多自然型河川の実験をここでやっています。

それから和泉川です。ここは横浜市が管理している川としては長い方です。この河川改修に、1980年代から入って、10年がかりでやりました。実際に担当

したのが、よこはま川を考える会のメンバーの吉村(伸一)さんと、あと、農村・都市計画研究所の橋本(忠美)さんです。

要は、まちづくりとして考えようよ、ということで展開したことなのですね。ここも最初に小学校のワークショップをやりました。子どもはどこで遊んでいるか、というワークショップでした。川であまり遊んでいなくて、川のそばの緑地で遊んでいる、というのがはつきりしてきて、緑地と一体で川も整備しなくてはいけない、ということで、流域も含めて整備した事例です。

活動支援と物理的整備の関係

最後に、自分の関わった仕事が歩いてみての感想です。

水辺をめぐる市民活動は、ここ30年間、継続性がある、広がりをもって展開されている、というのを実感しました。ほとんど毎週、どこかで川のイベントをやっています。特に鶴見川はすごいですね。

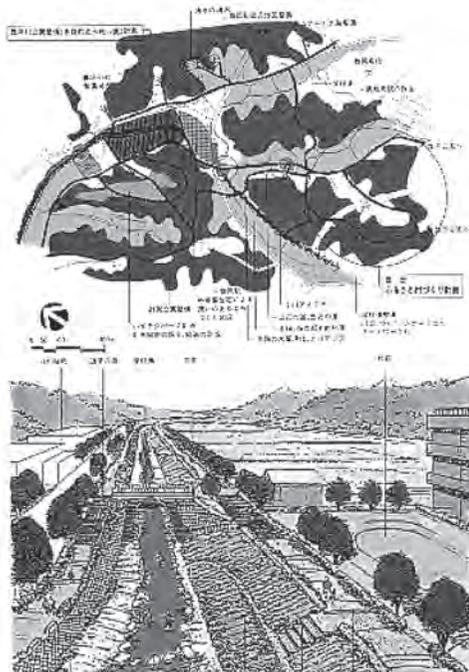


図4

● まいおか水と緑の会発足(1982年)

公園予定地の開墾、農業体験
水源の確保
横浜市大村橋研究室の参画
FGFの活動助成

● 舞岡公園開園(1992年)

● 舞岡小学校水辺の楽校(1990年)

親子3世代ワークショップ
川と学校の一体整備
道草通学路

● 小川アメニティー整備

舞岡駅から公園のアクセス路

土井一成
小沢朗

今井信一
堀勇良

小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

そういう活動をしている友達に聞くと、今、水辺の環境に関わる活動を支援する仕組みと、川を物理的に整備するところがうまくリンクしていないのではないか、ということです。水辺の活動をやっていると、当然、こうふうにしたい、ああいうふうにしたい、こういうのを造りたい、とか、こうだったらいい、というのが出てくる。ないしは、こういうふう維持管理していったらいいんじゃないか、という案も生まれる。そういうこともきちんと提案したいのだけど、そういうのを一括して受け取るところが見えにくくなってきている、という話を聞きました。

市民一人一人も、今、水が戦略物資になってきている中で、先程言った「5億tの雨水を使わないで流して、5億tの水道水を外から持ってくる」というサイクルをもう一回、水循環という視点でも考えていかなければいけないのではないかと私は思います。

そのため、一つは市域を超えて、少なくとも道志村の水源のことは理解する。道志村は山林全体の約半分が横浜市有林で、2800haぐらいあります。大正5年(1916)に水道の水を確保するため、横浜市が買っているのです。そのおかげで、港の水は赤道を越えるまで水が腐らない、ということで横浜の港にも貢献しています。今、横浜市の水の消費量全体の15%が道志村から取水しているそうです。ただし、相模川の下流域の水とブレンドしているので、ものすごくきれいな水ですので、横浜の水道にもたらす効果は40%ぐらい、つまり道志村の水質という面からも考えると、道志村の水というのは4割ぐらい貢献しているそうです。

それから身近なところで言うと、雨水の活用も大事な、と最近思っています。といろいろあるのですが、今回、久しぶりに散歩したて「水辺を楽しもう」という感覚が戻ってきたのが非常にうれしかった、ということがありました。

なぜ都市デザインで「水と緑」

鈴木：お話、ありがとうございました。私から質問したいことは、80年代の初期に、都市デザイン室でなぜ水と緑を手掛けることになったのか。先程のお話の中で

は、都心は国吉さんがやっていて、郊外に行ってフィールドが広がっていった、ということだと思ののですが、普通であれば、河川審議会の答申もあって、河川の担当部局から動いていくはずだと思うのですが。なぜ都市デザイン室だったのか、ということと、それをどう広げていったのか。先程、「川を考える会」の存在も重要だった、と言われましたけれども、その点について少し、解説を加えていただけないでしょうか。

宮澤：都市デザイン室で70年代に、きちんとデザインされた広場の噴水や河川プロムナードというような形で展開はしてきました。ところが肝心な川を含めたところに全然手が着いてない。国の総合治水のための組織はあるのですが、川の管

管理者からオーケーが取れないと市は何もできない、という関係が当時、はつきりあったのが一因だと思います。

幸いなことに、80年代は総合治水を考えなければいけない時期に入ってきましたので、河川担当も地域、都市ということを考えざるをえなくなってきました。ただ、河川担当に任せておくと、上意下達の関係になってしまい、市民も町内会主体で、80年代は「計画の説明」と言っても、対象は町内会の限られた人々でした。水と緑の環境に問題関心を持って関わっていかう、という人たちをどう組み込んでいったらいいのか、ということが課題だったのです。

その点、都市デザイン室は、区の魅力づくりを実際に展開していく中で、市民参加の手法というのを一方では開発していました。そういう仕事を担う事ができるセクションは、残念ながらデザイン室しかなく、また、デザイン室には自由度があって、そういうことが許されたのだと私は思っています。

もう一つ、横浜でも大岡川の事例があったり、横浜以外でも長崎の事例とか、ポツポツと河川の再生に関わろうとする動きが80年代初頭ぐらいからあって、川に関わる市民グループと行政の連携が始まりつつありました。よこはま川を考える会も、そのメンバーが、最初の構想から基本計画を作るまで、本当に手弁当でやってくれました。普通のコンサルではとても

できません。そういう幸せな出会いがありました。

鈴木：「水と緑」の基本構想を作った時に、行政が発注するコンサルタントが主導するではなくて、むしろ庁内や庁外の、その専門家であるとか市民の方たちと一緒に、構想を実質的に作っていったことが背景にある、ということですね。

宮澤：そうです。

デザイン室の影響でワークショップ

鈴木：分かりました。そういうところから、市民参加のスタイルができてきたようにも思います。きょうは川を中心にお話しいただきましたけれども、緑の方のまちづくりでも、例えば昭和60年(1985)にかに山公園のワークショップという、かなり実験的だったと思われるプロジェクトがありました。そういうワークショップによる計画づくりのノウハウなどは、どういところから得ていたのでしょうか。

宮澤：僕がワークショップという言葉聞いたのは、国吉さんからです。国吉さんがローレンス・ハルプリンというアメリカのランドスケープ・デザイナーが、日本で初めてワークショップをやった時に、国吉さんが自費で参加されて、その報告会を聴いたのです。僕はその頃、港北ニュータウンにいて、すごいなと感心しました。そこでワークショップという言葉に出合ったのです。

私の学校を造っている時の経験でも、公共施設は使う人の顔がちゃんと見えないのですね。特に学校がそうです。新しい学校を造る時に、校長先生も決まっていないし、何にも決まってない。だから相談する人がいない。そうすると標準化されているものを組み合わせて、文句が出ない施設を造る。60点は採れても、それ以上採れるシステムになっていなかったわけですね。

それに対してデザイン室が「いや、地域の施設なんだから、その地域に合った学校を造ろうよ」と言う

のです。僕はいちやもん付けられたような気持ちで「学校も何も分からないやつが、何を言ってるんだ」と思ったのですが、反発しているうちに、だんだんミイラ取りがミイラになって、「もつともだ」という思いがありました。

川を考える会の市内外の評価

国吉：昭和57年(1982)から都市デザインチームが企画調整局所属ではなくなり、都市計画局に移って都市デザイン室となった時の最初の担当が宮澤さんでした。田村さんや岩崎さんが牽引力になって都市デザインが展開していた時期から、都市計画局の中の都市デザイン室としてその総合調整の力が少し薄れ、かつこれからどうやっていくかと模索しているときに都市デザイン室に入られたのが宮澤さんなのです。

当時、いろんな戦略を持っていかないと、先程、宮澤さんが言ったように、口だけ言っていれば大丈夫、ではなくて、ノウハウもたくさん付けていかなければ駄目ですし、都心部だけやっていればいいわけでもなくて、いろんな新しい戦略家が入ってほしい、という状況であったのです。いろんな違ったタイプの人がいる方が、デザイン室としてパワーが生まれる、ということでパワフルな宮澤さんに来て欲しい、とお願いしたわけです。もともと学校建築で頑張っていて、建築にもこだわっている方でした。

そういう中で、川の計画というのは、その前、企画調整局時代に田口君が大岡川プロムナードをやった例はあります。ワークショップについては、かに山での試み以降、小学生向けの副読本みたいなものを作って、小学校で使ってもらおう、と働きかけたり、そういうところからまちづくり教育みたいなものも始めよう、ということも宮澤さんはきちんとやろうとしていました。

川の問題は不思議な展開です。部局の担当課よりも、河川の基本的なことを「川を考える会」の方がいろいろ知っていながら、局の中では彼らはあまり評価されない状況がありました。そういう中で、かろうじ

土井一成
小沢朗

今井信一
堀勇良

小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

VIII

都市デザインと市民参加

て都市デザイン室の宮澤さんや綱河君、園部君と
いった方々が連携することによって、孤立しないで取
り組めたような状態でした。その辺がちよつと、庁内
的に不思議な感じで、その活動は外部的には評価さ
れているのですけれども、横浜市の中で評価された
かどうかは疑わしいのです。

ワークショップの系列はいろいろな方々がその後、
展開していますし、市民も学者の方もどんどん成長
していますので、宮澤さんはそういった方々が自立し
ていったところについてはもうあまり触れない、とい
うことだったと理解しています。

鈴木：今のお話を聞いてよく分かったのは、ある意味
では、組織的な目標よりも、組織のディシプリンを超
えて、ある目標を持っているんな人たちが連携し合
う。それは専門家であったり市民であったり、あるい
は庁内の関係者であったりして、そういう人たちが
お互いに何かリレーし合うことで、一つの運動論的
な展開を、水・緑のまちづくりでは繰り広げていった、
というふうに思います。そういった視点で今までの活
動を振り返って、宮澤さんにとって何かターニングポ
イントのようなことはありますでしょうか。

振り返り向いてくれなかった川

宮澤：僕は、子どもが生まれた頃、今から35年前か
ら6年間ぐらい、上大岡に住んでいました。すごく暮
らしやすいところなのだけれど、子どもを銭湯に連
れていくのでも、乳母車を通せないぐらい道路事情
が悪い、という印象がありました。それで、上大岡の
川掃除をやる、と聞いた時、ぞぞつとしましたね。そ
の時は、もう上大岡には住んでなかったのですけれ
ど、「やっぱり、おれ行くぜ」と掃除に行ったのを覚え
ています。

かつて、横浜市は川に全然振り向いてくれない、と
いうところがありました。ごみを揚げても環境事業局
は持っていかないし、河川管理者は、破傷風になると
いけないから、予防注射を打っていない人は川に
入ってはいけない、と言うような時代だったのですね。

それを超えて仕掛けていったので、そこで僕は感激
しましたね。

鈴木：その仕掛け人は—

宮澤：先程言った森さんです。公害研究所の森さん
の一派は公害反対から、もつともつとまちをよくして
いこう、とシフトチェンジしていったのです。それから
上大岡のまちづくりを担当しているセクションの人々
ですね。僕も再開協議会の会合に、直接の仕事では
ありませんけれど、6時以降に行つて、わあわあ、あ
あしよう、こうしよう、とかやっていました。それが僕
の転換点だったような気がします。

鈴木：森さんも村橋先生もお話の中に出ていたので
すけれど、残念ながら亡くなられて、この間の経緯は
資料として残っているようで、意外と残っていないの
ですね。かに山もそうなのですけれど、意外とその足
跡はたどられていない部分もあるので、そういう意味
では、今回は非常に貴重なお話をしていただいた、と
も思います。

せつかくの機会ですので、質問等あればぜひ聞いて
いただければ、と思います。

国吉：30年ぐらい前の上大岡川は、本当に臭かったの
です。大岡川だけではないですけれど。今、当たり前
のごとく、川でカヌーをやったりしている様子からは
想像できないぐらい。ですから、大変な運動だったと
思いますね。庁内的にデザイン室が、それをオーソ
ライズして一緒に旗を振ることで、この運動の一部
を支えることができたのかもしれません。そういうの
は運動体だけだとなかなかうまく行かないのですけ
れども、都市計画局の中で、仕事として旗を降り続け
たのは、宮澤さんやデザイン室側にいる人たちの運
動を引つ張っていくための大きな役割だった、と思
います。

その辺の連合体のような動きがはつきりしていな
いのですけれど、そういう動きが今後もやはり必要だ
な、というのを、きょうの話を聞いて感じましたね。

鈴木：亡くなられる前の村橋先生とは私、横浜市大で同じコースにおりましたので、少しお話をしたことがあるのですが、そういった活動を行っている人たちも若干、高齢化が進み、何か新しいことを考えなければいけないのではないかと、という問題意識もお持ちだったように思うのです。その点について、宮澤さんはどのようにお考えですか。

宮澤：次の世代がどう引き継いでいくか、ということは課題の一つです。しかしながら、自然や環境への取組には学校の関わりがあり、学校とのつながりから若い世代へ伝わっているようにも現場では見受けられます。学校の果たす役割、大学や小中学校の教育のフィールドとして、まちを使っていくことはすごく大事だと思います。

学校と一緒に物事を考える、ということは、僕も道を造る時に意識的にやっていたのです。戸塚の区画整理でも、学校を意識して、学校に仕掛けていきました。学校の教育と連携しながらやっていく、というやり方に、もっとエネルギーを割いていいのではないかと、という感じがしますね。学校の先生の中には力になってくれる人がいます。ワークショップの手法と学校の先生の教育の仕方と、同じで、その辺、先生はうまい。そういう人と生徒と一緒に考えて、プログラムするのではないか。ワークショップというのは既に学校で先生はやっている、という感じがしたこともありました。

鈴木：常に新しく人材をつないでいく存在として、いくつかキーパーソンになるような人というのがいるだろう。そこに戦略的に仕掛けていく、ということが今後、必要になってくるのかもしれない、ということですね。

川のことを分かってくれる人と

質問者1：水遊び関連で、例えば、破傷風とか、水遊びに伴う事故とか、どうするんだ、という話がすぐ出てくると思うのですが、それをどのようにクリヤされたのか。もう一点は、ほかの自治体で、農業公園が失

敗した、という話でしたが、その原因は何であつたか、というところで聞きたい。

宮澤：事故は常に裏側にある。一方で、水とか川を知ってもらわなければいけない、ということがあるわけですね。ですから、その危険性も当然、分かっているってもらわなければいけない。当時、結構、川好きの先生もいまして、川に入ろう、という先生は、その怖さとかを併せて生徒に教えていました。

受講者：その当時は、どうやって説得されたのでしょうか。

宮澤：分かってくれる人とやっていたね。分かってくれない人を説得しよう、なんて思いませんでした。自己責任でやるのだから、と。

他の自治体で農業公園が失敗したのは、多分、推測なのですが、市街化が進む中でモデル的に農業公園をつくろうとしても、日常的に運営できるノウハウを持っている人がいなかった、ということがあったと思います。

舞岡公園は、横浜市が主体的に用地を買って入った、初めての総合公園なのです。それまでの総合公園は基地などだったところ、三ツ沢公園は砲台のあったところ。横浜市大の村橋さんは、最初の助走を付けるのに10年も掛けて、公園の運営にバトンタッチするのはその10年後ですね。あそこの場合はそれぐらい丁寧に行われているのです。

ワークショップで採り入れた意見

受講者：まちづくりにワークショップを採り入れることの難しさについて、私は、現在の住民の意見と将来の住民の意見は必ずしも一致しないことが難しさなのかと思いましたが、その点はどうぞお考えでしょうか。ハードに対して、一度、住民の意見を採り入れて造ると、例えば世代が変わって、意見が変わって、新しい意見を反映させようと思っても、難しい例もあるかと思つたのですが。

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

細河功
賀谷まゆみ

宮澤好

宮澤：いわゆる基盤は、しっかり行政が責任を持ってやる必要はある、と僕は思いますよ。公園でも、造成をどうやって、表土や排水をどうやって、というのはしっかり考えて造らなければいけないわけですね。そこまで住民の人に一緒になって考える、という場合も、中にはいますけれども、いかなかったら、基盤の部分は、こつちがしっかり造らなければいけないものとしてあると思うのですね。

ワークショップをやっても、このことについては専門家に任せる、という部分はあります。おれたちはこういうふうに使いたい、こうなるといいな、と言われて、そこから先の具体のデザインとか、具体の整備の話になった時に、それはやはりプロが頑張ってくれ、こうなってほしいんだから、プロの方で頑張ってくれ、という領域は必ずあると思います。ですから、世代が替わってもいいように、基盤をどう造っていくか、とか、物事を考える仕組みをどうつくるか、というのが大事です。

もう一つ、やはり10年なり15年なり20年たつたら、また、つくり直すのです。現実にはそうです。20年たつとつくり直します。25年たてば、確実につくり直していく、ではないかな。基盤までやるかどうかは別にして、表面的なものはやはり、ハード的にもやはり、変わっていけるようにする必要はあると思いますね。

鈴木：よく、田村明先生に言われたのが、プランナーは今の市民のために働くのではなく、未来の市民のために働くんだけ、と。私もワークショップをやる時に、必ず最初に、誰のために考えるのか、自分たちの世代ではなくて、自分の子ども、孫の世代のことを考えて想像してみましょう、というところから入る。これがワークショップの手法でもありますし、先程、宮澤さんがおっしゃられたように、ここからこちらの部分は、むしろ専門家に思い切って任す。逆に言うと、ここからこの部分については、市民の意見を大胆に採り入れていく。そういう部分とはワークショップのテクニクとしては必要な部分である、と私自身も思います。

知恵とお金が集まるように

野原卓：先程、鈴木先生のご指摘もありましたけれど、近年において市民活動が新しい展開をしていく上で、何かもう一エッセンスないと、という時、今までのやり方をもう一回りパイバルすればいいのかどうか、気になっているところがあります。その辺で何かお考えとか、何かアイデアとかがあつたら、お伺いさせていただきたいと思います。

宮澤：鶴見川流域ネットワークは今でもすごい活動をやってますね。必ず毎週どこかでイベントをやっていて、それをちゃんと情報化してアクセスできるようにしている。なぜできているか、というと、横浜市は支援をしていないのですよ。河川管理者の京浜工事事務所の支援があるからです。そのもとは河川環境管理財団です。やはり、独自の財源を持たないと無理だと思います。

横浜市が何かをやるための一つのアイデアとして、僕は河川沿いの区域を河川環境整備区域みたいにして、そこで建築行為とか開発行為があつたら、デザイン室に全部相談に来てください、として、物的な整備を通じてアプローチしていく、そういうきっかけをつくることも必要だろう、と思います。ソフトの方の支援態勢と、ハードの方でもそういう協議をしていくことが、もつとあつていいのではないかと、と思います。

鈴木：河川に関する市民活動自体も、少し先が見えにくくなっている状況があるのですが、折しもきょう、国会でNPO 税制の法案が通って、寄付等がやりやすくなる、というような話もあるので、そういった活動に寄付が集まり、自活できるというか、少なくともある程度、自分たちでやっていけるようなものを、運動論としてもつくっていくことが、横浜市でも必要なのかな、とも思いますね。予算に余裕がなくても、みんなの知恵とお金がそういうところ集まるような流れをつくることは可能だと思います。

きょうは本当に貴重なお話を聴かせていただきまして、ありがとうございました。